

投稿

比嘉義裕さんを偲んで ～星カフェみやぎ座のご紹介～

原田 敦（東北大学天文同好会 OB 会）

1. 比嘉さんへの手紙

拝啓

秋も深まり日が落ちて程なく冬の星座が上ってくる季節となりました。これからは星がきれに見える季節ですね。今頃は流星の発光圏で間近に流星の短痕を見ながら目を輝かせているのでしょうか。それとも流星の進行方向からチューブ状の痕の中を通り抜けて、ほらやっぱり、とにやけているのでしょうか。

突然貴殿の訃報を聞き何が起こったのか頭の中が混乱してから2ヶ月が過ぎました。そろそろ落ち着いて現実を受け入れられるようになってきました。貴殿と出会ってからまだ日が浅かったのですが、なんだかもう何十年も星の話をしてきたような気がします。

貴殿と出会ったのはとある研究会の懇親会でした。私が長野の大西さんと話していたときに「大西さん、ちょっと紹介してよ。」と言いながら近づいてきたハンチング帽をかぶった貴殿は5分後には旧知の仲のように星について語っていたのが印象的でした。どのような話題にも自分の意見をもっている引き出しの多い人だなあと思ったものでした。

その後いろいろな場所にご一緒させてもらってわかってきたのが、貴殿が天文普及に対して並々ならぬ熱意を持っていたということでした。昨今の貴殿の活動はサイエンスカフェと天文素人へのアプローチ方法論[1]に力を入れていたように見えました。昔は天文少年、天文少女がそこらにいて地域の天文同好会も

老若男女が活発に活動していました。ところが昨今はこの同好会でも高齢化に悩んでいます。決して若年層の天文好きな人たちの数が減っているようには見えないのにです。仙台にサイエンスカフェを孤軍奮闘立ち上げたのは、世間の天文へのアプローチ方法が多様化し、旧態依然とした同好会活動だけではその多様なニーズに対応できていないことを感じたからなのですか。

貴殿の立ち上げた天文サイエンスカフェ「星カフェみやぎ座」は確実に天文ファンを増やしていましたね。手弁当で持ち出しでどうしてそこまでやるのだらうと思っていたところ、今まで受けた恩を返していると誰かに話していたとか。貴殿らしいというか、らしくないというか。しかし貴殿の撒いた天文の種は確実に育っているようです。貴殿が他界したのが第7回星カフェみやぎ座開催の二日前でした。無我夢中で貴殿の企画していた第7回、第8回を引き継いで開催し、ひと息つけると思いきや星カフェみやぎ座の終了を惜しむ声が多く寄せられています。ゲストとして話をしてくださるとの申し出も既に受けています。今頃貴殿が宇宙の渚付近からにやにやしなから見ているのかと思うと、思い通りになるのも癪だと思いつつも引き継いで継続していくことにしました。もしご意見があれば今からでも戻ってきていただけると幸甚です。

これから冬を向かえ、ふたご群に思いを馳せているころでしょうか。空の上では風邪を引くこともないのかもしれませんが。天候に左右されないのが毎日が流星群とはいえ、たま

には地上の活動も気にかけてくださると幸甚です。

追伸

のんびりと星を見上げていた一天文愛好家であったはずの私なのに、気が付けば貴殿よりたくさんの宿題を課せられてしまったようです。ずるいぞ、たまには宿題の採点をしに戻って来い。

敬具

平成二十七年十一月

原田 敦

比嘉義裕様

2. 星カフェみやぎ座について

星カフェみやぎ座は故比嘉義裕さんが主宰していた天文関連のサイエンスカフェです。2013年9月9日に第1回を開催して以来、不定期に2015年3月7日の第6回まで開催されました。故人は2015年9月5日の第7回の企画・準備をし、第8回の企画に着手した9月3日に旅立っていきました。第7回、第8回は私が引き継ぎ天文仲間の手助けを得て開催することができました。

星カフェみやぎ座はお酒を飲みながら前半はゲストが話題を紹介し、その後皆でわいわいと質疑をするというスタイルでした。参加者は会場の関係もあり2-30人で推移していました。この人数が会場の制限なのか故人が好ましいと思った数なのかは不明ですが、思い返せば心地よい人数だったような気がします。これが参加者が50-100人であつたら星カフェみやぎ座とは別のものになっていただろうと思います。

2.1 実施実績

星カフェみやぎ座の実施状況を記しておきます。引き継ぎ分を含めて8回開催されまし

た。第1回は東北大学のさくらキッチンにて天文学会の前夜祭としての意味合いを込めて開催されました。第8回は宮城県大崎市のパレットおおさきにて開催しました。この回のみアルコール類抜きでのサイエンスカフェとなり、終了後に屋外にて長野高専の大西さんの星景写真講座を急遽開催しました。第2回から第7回までは仙台市内の飲食店においての開催でした。

表1 過去の開催テーマ一覧

回	テーマ
	ゲスト
1	ベテルギウスは、まだあるのか (星の最後を考える)
	山岡均(九州大学) 大西浩次(長野高専) 土佐誠(仙台市天文台)
2	見逃すな! アイソン彗星がやってきた!
	土佐誠(仙台市天文台)
3	宮城県と周辺に伝わる星の和名
	北尾浩一(中之島科学研究所)
4	宇宙に放たれる不思議なカミナリを捉えろ! スプライト観測衛星「雷神2」
	吉田和哉(東北大学)
5	小惑星探査機「はやぶさ」がもたらした“モノ”と、「はやぶさ2」への期待
	阿部新助(日本大学)
6	ディープなアポロ疑惑講座-人類は本当に月に到達したのか?
	寺藺淳也(会津大学)
7	南極やハワイに望遠鏡を持っていくのはなぜだろう?
	市川隆(東北大学)
8	宇宙の渚 系外惑星に名前をつけよう
	山本真行(高知工科大学) 大西浩次(長野高専)

2.2 目 標

故人は天文教育普及研究会の発表において以下のように述べています。[1]

『星カフェみやぎ座』は「天文(学)は文化である」を最大の目標

これは、天文学はサイエンスであるが趣味としての天文は必ずしもサイエンスだけとは限らず、星を見ること学ぶことが文化として根付かないと衰退してしまうのではないかという危惧があったように思われます。過去の開催テーマでも星の和名やアポロ疑惑などを取り上げていることからサイエンスだけでは無い方向性が見えてきます。

天文を文化にするということがどういうことなのか、そのために何をしようとしていたのかは明らかではありません。しかし、少なくとも星カフェみやぎ座はそれを具現化するための手段であったことは間違いのないところであり、これを引き継いでいくことの意義はここにあると言ってもいいと思います。ただ参加者が何を求めてサイエンスカフェに来るのかは多種多様であると思われ、毎回同じものを求める人が来るというわけでもないでしょう。参加者のニーズと提供テーマのミスマッチが生じないようなテーマ設定、事前情報のアナウンス等が必要と思われ。

2.3 課 題

サイエンスカフェはある程度定期的に開催すべきであると考えています。そうしないと文化として根付かせるという前提自体が崩れてしまうことになるでしょう。故人はカフェの開催における課題として、費用、雑用、告知を挙げています。[1]

(1) 費用

費用としてはゲストへの謝礼と運用費用があります。運用費用の中には名札、領収書等の費用や通信費、参加者の保険加入費も含ま

れます。参加者を 2-30 名とするとお店に支払う飲食費以外にこれらの費用をすべて上乗せすると成り立ちません。故人は自らの人脈を活用して謝礼なしでゲストを依頼していましたが、人脈は引き継がないためこれはかなり大きな問題となります。

(2) 雑用

ゲストとの交渉、会場との交渉、保険加入、参加者との連絡等雑用に分類される作業が多々あります。故人は自営業とはいえこれらを一人でこなしていたのは大変であったろうと推察できます。複数人による運営委員会を組織することに解決策を見出すべきだと考えます。

(3) 告知

既に常連参加者がいる場合は別として、カフェ開催の告知をどうするかは難しいところです。故人もこれがもっとも苦心していると言っていました。天文のすそ野を広げようとすると天文ファンのみならず、今天文ファンでない人の目につく方法を考える必要があるでしょう。

3. おわりに

仙台で唯一の天文サイエンスカフェであった星カフェみやぎ座を継続開催することは天文の一般普及を推進するためには有効なことであり、故人の目指した天文を文化として根付かせるための手段のひとつであると考えます。継続開催をここに記すことで故人への追悼文とさせていただきます。

文 献

[1] 2013 年度 天文教育普及研究会・東北支部研究会 発表資料,比嘉義裕

原田 敦